

2003年、2004年度 国庫補助事業

かん山古墳 2、3次調査

2005年

大和高田市教育委員会

例 言

1. 本書は奈良県大和高田市築山487に所在する、かん山古墳の第2、第3次の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は2003年度、2004年度国庫、県費補助事業として大和高田市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、2003年度は8月28日に開始、2月8日をもって終了し、2004年度は10月7日に開始、3月31日をもって終了した。(それぞれ準備期間等を除く。)
4. 調査組織は次のとおりである。

(2003年度)

大和高田市教育委員会

教育長 田中隆彦

事務局長 西川達也

事務局次長 赤井 勉

生涯学習課長 松浦一弘

文化財係長 塩野谷博司

技師 前澤郁浩(現地調査担当)

吉田貴子(調査補助)

大和高田市公園緑地課長 阪田保彦

(2004年度)

大和高田市教育委員会

教育長 楠 征洋

事務局長 西川達也

事務局次長 赤井 勉

生涯学習課長 松浦一弘

文化財係長 塩野谷博司

技師 前澤郁浩(現地調査担当)

吉田貴子(調査補助)

大和高田市公園緑地課長 阪田保彦

調査協力者 吉村芳俱(奈良県文化財保護指導員、大和高田市文化財を考える会会長)
岡野弥須司、勝谷芳司、白鳥嘉(以上、築山地区総代)

5. 調査にあたり、下記の諸機関、諸氏にご指導、ご助言を賜った。記して感謝したい。
奈良県教育委員会文化財保存課 奈良県立橿原考古学研究所
(財)元興寺文化財研究所 大和高田市文化財保護審議会
大和高田市文化財を考える会 宮内庁書陵部
青木 敬、網干善教、池山保信、石田成年、石野博信、伊藤健司、井上義光、泉森 峻、
小栗明彦、岡林孝作、河上邦彦、木下 亘、西藤清秀、清水昭博、清水真一、竹田正則、
塚原二郎、寺澤 薫、中井一夫、福田さよ子、藤山三郎、豆谷和之、光谷拓実、
宮原晋一、柳沢一宏、吉村公男
姜 秉權(大韓民国 忠清文化財研究院)
鞠 星姫(大韓民国 忠南大学校 百濟研究所)
白 雪松(中華人民共和国 北京 社会科学院考古研究所)
6. 本書の執筆、編集は前澤が行った。

目次

1、はじめに	3
2、1次調査の概要	4
3、2次調査の概要	4
挿図 かん山古墳測量図	5
4、3次調査の概要	7
5、まとめ	8
図版	9
報告書抄録	17

図版目次

空から見た築山古墳とかん山古墳	10
かん山古墳 第3トレンチ	11
かん山古墳 第3、5、6トレンチ	12
かん山古墳 第7、8トレンチ	13
かん山古墳 主体部検出状況	14
かん山古墳 第1主体部 木棺、棺床検出状況	15
かん山古墳 墳頂 埴輪列検出、埴輪列半裁状況	16

1. はじめに

大和高田市教育委員会は、大和高田市築山487の市立築山児童公園内に存在するかん山古墳の範囲確認調査を国庫補助、県費補助を受けて2002年から進めている。本誌は2003年度に実施した2次調査と、2004年度に実施した3次調査の概要を報告するものである。

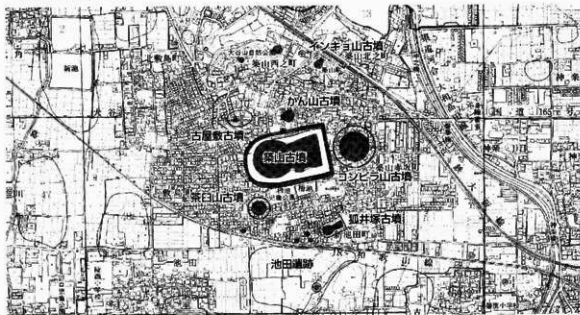
かん山古墳は、奈良盆地の東部に南北に広がる馬見丘陵古墳群の南端部の一角、大前方後円墳の築山古墳のすぐ北側に造成された大型円墳である。

築山古墳の周辺にはこれ以外にも、前方面東側に直径9.6mの規模で円墳としては全国で3番目の大きさを誇るコンピラ山古墳、また後円部の南西側には直径5.0mの茶臼山古墳というように、5世紀の前半の限られた期間に大型の円墳が近接して築造された特徴があり、古墳時代中期の社会構造を解釈していく上で重要な遺構とも評されている。

かん山古墳とその周辺一帯は、戦後、市によって買い上げられ、1950年ごろ公園として開放された。そして網干善教氏が、58年に刊行された『大和高田市史』の「上代の大和高山」の章でかん山古墳の存在を執筆し、古墳として掌握されるようになった。

その後、市立公園内に存在することから、開発の危機にさらされることもなく、古墳は公園開発時の姿を留めてきたが、近年に至って墳丘の斜面で埴輪列が露出するなど、土砂流失が著しくなってきたため、教育委員会としては将来の養生工事を見据えた範囲確認調査を実施することになった。

調査に先立って99年3月には、本誌にも掲載している航空写真を撮影し、航空測量図を作成した。



かん山古墳と馬見丘陵南端の古墳

2. 1次調査の概要

まず2002年度に実施した第1次調査についてまとめておきたい。調査は埴輪列の露出のあった、墳丘の北西側の斜面から取り掛かった。トレンチは2箇所、第1トレンチは墳頂部北西肩部分から丘陵の北西端部にかけて設置し、埴輪列の露出が認められた周辺においては、南西に向けて拡張区を設けた。第2トレンチは、第1トレンチの成果や露出した埴輪列の位置から割り出した、墳丘の西側でテラスが推定できる位置に設置した。

これらのトレンチの調査から、かん山古墳は、

- ①尾根の先端に築造された直径50mの規模の円墳である。
- ②墳丘は、斜面にテラス1段を設けた2段築成である。
- ③葺石が葺かれていない。
- ④周濠は造成されていない。
- ⑤テラスに樹立された円筒埴輪の特徴から5世紀前半の築造である。

ことなどの事実が判明した。

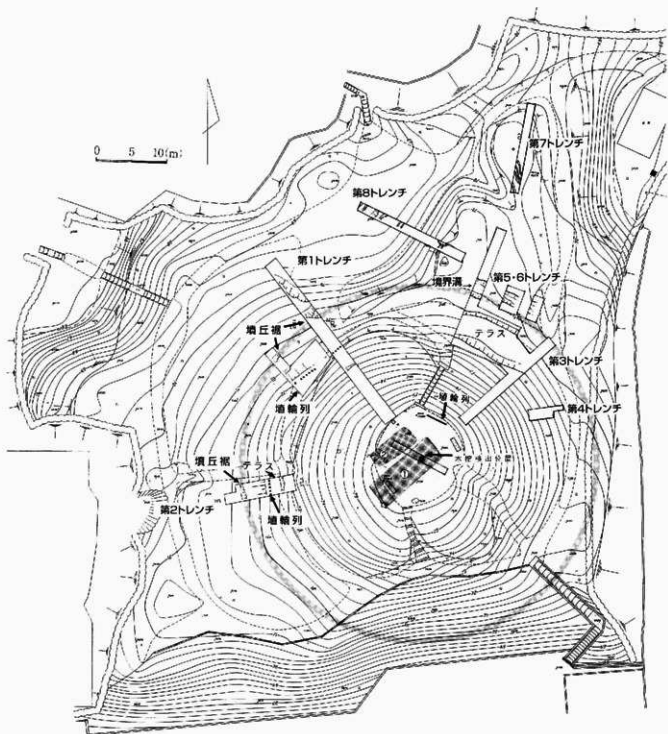
3. 2次調査の概要

翌2003年度に実施した2次調査は、墳丘の北東側一帯を対象とした。この周辺は、墳丘をのせる北東から南西方向に伸びる尾根が旧状をよく残しており、古墳が築造された地形を容易に理解することができる域である。墳丘の残存状況を把握することに加え、尾根上で古墳の外部施設、これまで未確認だった遺跡等を検出することも調査目的とした。

トレンチは、墳丘斜面の範囲内に大(第3トレンチ)小(第4トレンチ)2箇所、墳丘裾付近に2箇所(第5、6トレンチ)、尾根稜線上と尾根の北西側斜面にそれぞれ1箇所(第7、8トレンチ)、合計6箇所設置した。

第3トレンチは、尾根稜線の延長にあたる墳丘に設定した。この範囲には外部施設等の検出される可能性が最も高いと思われたため、特にテラスの推定位置を中心に広い面積をとった。またトレンチの両端は、墳頂と裾側、および尾根の方向へ長く延長した。

第3トレンチでは、テラスを検出することはできた。しかしテラス覆土から多数の円筒埴輪片が出上したものの、1次調査の第1、第2トレンチのような埴輪列は、まったく検出されなかった。テラスと周囲の墳丘斜面には、形状を整えるような盛り土の造成も見当たらず、すべて地山剥き出しの状態であった。テラス平面のレベルは第1、第2トレンチより約90cm低く、平面形状も歪で、テラスから裾への傾斜も不自然に緩やかであった。これらの状況から、第3トレンチのテラス周辺は、ある程度旧状を留めながらも、後世にかなりの改変を受けているものと解釈したい。



かん山古墳測量図

第1次調査…第1,2トレンチ
 第2次調査…第3～8トレンチ
 第3次調査…墳頂のトーン範囲。うち、
 濃いトーンの①・②は、それ
 ぞれ第1,2主体部を示す。

またトレンチの北東側一帯は、南北方向に延びる大溝状の遺構が検出された。検出面からの深さは1.5メートルを越え、テラスの東側はこの大溝に降りるための階段で破壊を受けていた。大溝はトレンチ北東端から第6トレンチの東半を通して南へと延びているようで、埋められた跡地は切通や、平らになったためか公園の遊歩道のようになっている。また大溝は第4トレンチの位置からさらに北へ延び、第4トレンチでは墳丘が大溝造成のため大きく削られ、原型を留めない状況であった。大溝の覆土からは、埴輪片に混じって近代以降の遺物も多量に出土したことから、戦時中に掘削された防空壕の可能性もある。

第3トレンチの北西部で、尾根側に延長したトレンチでは、幅3mで、検出面からの深さは1cmほどの溝が検出された。両肩から緩やかに傾斜していく船底状の断面を呈しており、溝の覆土に遺物は含まれていなかった。

続く第5、6トレンチは、この溝の延長部分を検出していく目的で設定した。後世の削平を受けていたため、わずかに底部分ではあったが、溝の延長を両トレンチで検出できた。

溝は尾根の稜線に直交するように掘削されており、第1、2トレンチで検出した墳丘裾から割り出した円形の裾ラインのすぐ外側に位置していることから、尾根と墳丘とを分ける境界溝と解釈できよう。この溝の検出は、周濠が無いことを裏打ちするものとなったとしておきたい。

第7、8トレンチは、尾根や墳丘周辺における更なる遺跡の有無確認をするために設置した。第7トレンチは、尾根の稜線上に設けたトレンチで、設置した範囲が低い円丘状の高まりを見せていること、そして周囲で埴輪片の散布が認められることから設置したものである。トレンチはこの円丘を断ち割るかたちで設置したが、円丘は人為的盛り土で、中から多量の埴輪片が出土した。埴輪には時期差がなく、すべてかん山古墳のものであった。このため、円丘は先に述べた大溝が掘削された際の排出土が埋められずに残されたものと判断できた。また第8トレンチは尾根の北西側斜面から、平面扇形の平場になっている区域へ設置したトレンチである。このトレンチはすべて地山まで掘削でき、盛り土や古墳の外部・外表施設を思わせるようなものは検出されなかった。平場の域では大きく地山は落ち込み、北東～南西方向に延びる溝を検出した。溝の覆土上で、ほぼ完形で6世紀後半の須恵器のはそう1点が出土したが、特に遺構に伴うものかは不明である。

2次調査での出土遺物は、ほとんどが埴輪で、コンテナ10箱ほどの量である。円筒埴輪や朝顔形埴輪をはじめ、墳頂から流れてきたと思われるが、家形埴輪と考えられる破片も含まれている。墳丘から離れた位置に設置した第7、8トレンチでは、須恵器のほか、中世の瓦質土器の破片も出土している。

4. 3次調査の概要

3次調査は、墳頂部の埋葬主体部の残存状況を確認するために実施した。

墳頂部全面の精査を2度にわたって実施することから始めたが、北西端で埴輪列を検出できたため、墳頂は築造当時の高さがある程度は保っていることがまず判明した。しかし精査後の墳頂は、平坦な状況を呈しているにも拘わらず、盗掘や攪乱と見られる輪郭がさまざまな形で随所に見られた。また、墳頂上面では水銀朱も目についたため、主体部は相当攪乱を受けていることも予想できた。このため平面的な精査だけでは、主体部の残存状況を確認することは困難と判断し、やむなく一部にトレンチを入れて墓塚などの痕跡を立体的に検出して、その形態の把握に努めることにした。

トレンチは精査をし終えた墳頂部で、盗掘場と思われる輪郭が、最も広く見える箇所、南東から北東方向に向けて設定した。トレンチの規模は、幅が1mで、全長は約9mに及んだ。平面的に慎重に掘削していくと、トレンチは南東端部を除いてほとんどの範囲が盗掘場の複数切り合い、集積した状態であることがわかった。大きな盗掘場はトレンチの南東側と中央、そして北西端の3箇所であり、うち特に大きなものは中央のものであった。

調査ではトレンチ内の盗掘場をすべて凌いだ。中央の盗掘場の底で破壊を免れた半円形の棺床が現れ、その底に割竹形木棺の一部が横たわった状態で検出された。盗掘者は墳を墳頂から垂直に堅穴を掘削していき、棺や棺床に至った段階で掘削を止めたようである。これだけの盗掘を受けていたにも拘わらず、棺が残ったことは奇跡的であった言えよう。現墳頂から木棺の上面までは、約220cmを測る。さらにトレンチ北西端の盗掘場の底でも破壊を免れた半円形の棺床が見つかったが、こちらでは棺の残存は確認されなかった。こちらは、現墳頂から棺床の底部までは、約120cmを測る。これらから、かん山古墳には大小2つの割竹形木棺を納めた墓塚が存在することが確認され、検出された木棺の樹種は、コウヤマキと分析された。

以降、トレンチの土層断面から断続的ながら墓塚を探り出し、これをたよりに墳頂部の盗掘場、攪乱場の覆土を除去しつつ、墓塚の平面検出作業を継続していき、平面長方形の大小2つの墓塚をようやく検出するに至った。以後大きな墓塚を第1主体部、小さな方を第2主体部と呼ぶことにした。木棺の見つかった第1主体部の墓塚の平面規模は、最大10.5m×3.6mで、第2主体部は最大6.4×2.8mを測り、双方とも切り合うことなく、主軸を北東から南西に向けてほぼ平行させている。第1主体部の墓塚は、平面で見るとほぼ長方形で、南西側が墳頂部を越えて墳頂の斜面にまで及んでいることが注目される。第2主体部の墓塚は、北東側の辺が南西側よりも0.8mほど広がっている。

つづいて円筒埴輪列について触れておきたい。先述のとおり墳頂部では北西肩付近でのみ、計9本の埴輪を、いずれも基底部の一部であるが検出することができた。直径25~30cmほどで、テラスで検出した埴輪と同じ位の大きさとして見てよいであろう。埴輪列は位置的に墳頂の端部にあたるが、弧を描かず直線に樹立していることが特徴的であ

る。埴輪を整然と並べて樹立させるための、いわゆる布掘りは確認されず、埴輪は盛土造成の過程で樹立されたようである。

出土遺物については、盗掘坑からの出土であるが、副葬品として碧玉製管玉、大刀、鉄鏃、刀子、朱が出土した。うち鉄製品に完形のもの無く、盗掘を受けた際折損している。これらの遺物は、朱を除き、すべて第1主体部のものである。また埴輪としては、円筒埴輪や朝顔形埴輪以外に、家形、盾形と思われる器財埴輪の破片が出土している。

5. まとめ

以上、かん山古墳の2、3調査の成果を概要ながら述べてきた。

調査前、50mもの規模の円墳でありながら、裾から墳頂まで5m弱の高さしかないのは不自然という見方であったが、今回の調査で墳丘が大きく削平を受けず、ある程度は築造当時の高さを保っていることが判明した。

築山古墳に近接する大規模な円墳のコンピラ山古墳や茶臼山古墳は、傾斜していく尾根の稜線上という不安定で低い位置に造成されている。しかしかん山古墳は、築山古墳の裾よりも高く安定した尾根上に造成されており、他の円墳との釣り合いをとったことが、規模の割りに墳丘を低くした要因であるのかも知れない。

墳頂では2つの主体部の存在を把握できたが、第1主体部では木棺が残存しているという予想外の事実が判明した。この貴重な遺物を今後どのように扱っていくかという、大きな課題が湧き上がった。木棺が検出されたのは棺床であるが、それを埋めているのは盗掘坑の覆土であるため、埋まっている木棺の環境が悪いのは言うまでも無く、関係各機関との協議の末、木棺を取り上げ保存し、古墳は史跡公園に整備していくことが策定された。このため当初3ヵ年計画だった調査も、さらに延長して行うことになり、今後は整備委員会を立ち上げて専門各分野の有識者の意見をとりいれつつ、慎重に進めていくことになった。大型円墳に帰属する、数少ない古墳時代中期の木棺の今後の調査成果に期待を寄せたい。

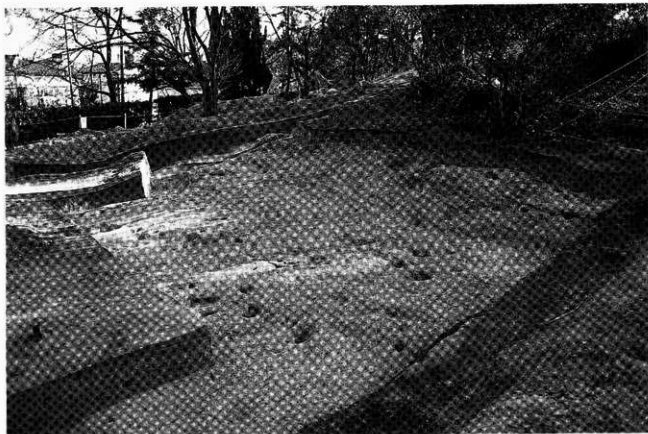
長年墳丘が公園として解放されながら、墳頂から一部分であっても埴輪列が検出されたことはまた幸運であった。

近年、畿内周辺でも円墳の埴輪列検出事例が増加しつつある。その成果を見ると、必ずしも墳頂の埴輪列が秀麗な円弧を描いているとは限らないようである。ただかん山古墳のような大和の大形前方後円墳に近接した円墳の事例と、それ以外の地域の事例とを機械的に結びつけていいものかどうか、慎重な検討が求められよう。

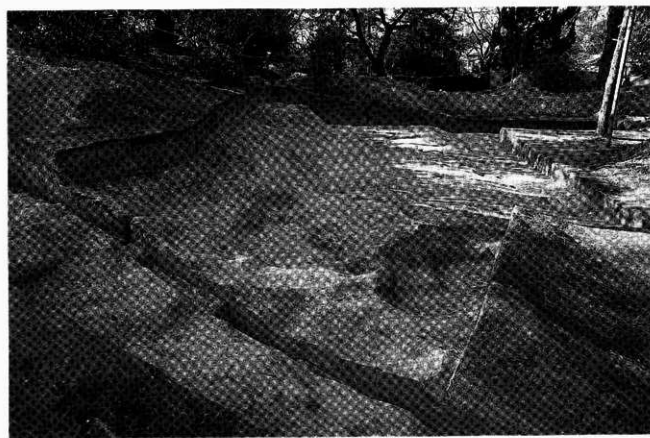
圖 版



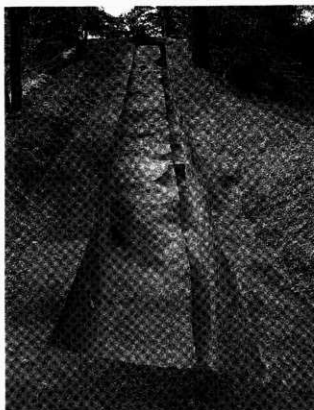
空から見た築山古墳とかん山古墳



かん山古墳 第3トレンチ（北西から）



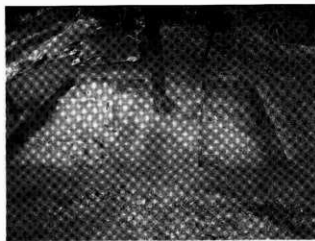
かん山古墳 第3トレンチ（北東から）



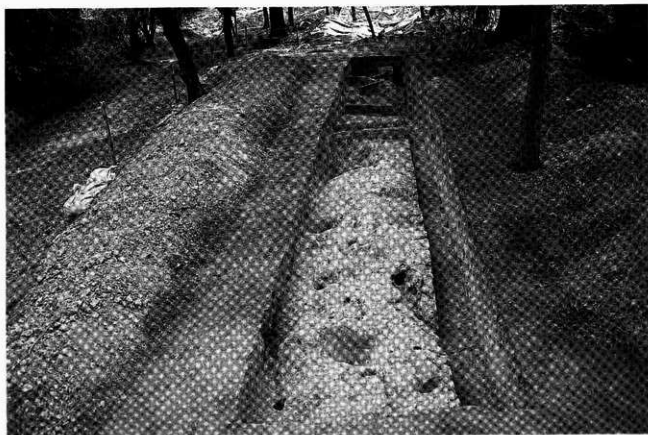
かん山古墳 第3トレンチ南東側
墳頂～裾 延長部分（裾から墳頂を見上げる）



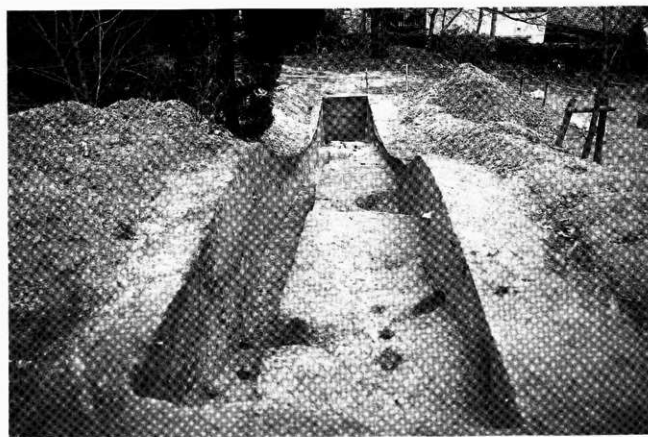
かん山古墳 第3トレンチ
テラス・墳丘裾、境界溝完掘状況



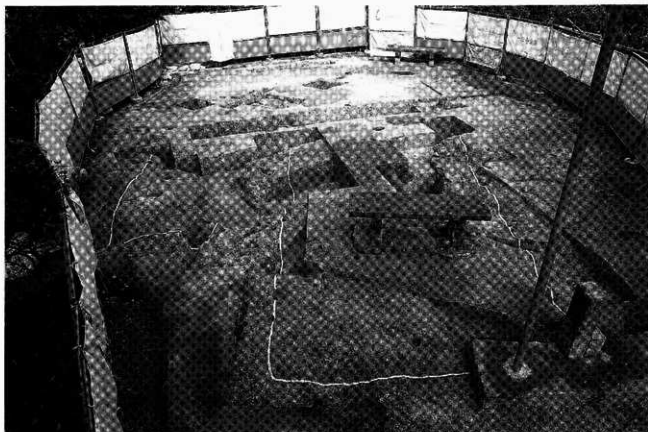
かん山古墳 第5・6トレンチ
境界溝完掘状況



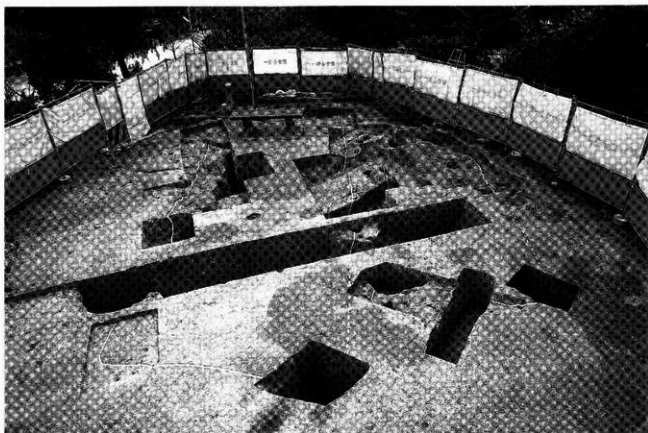
かん山古墳 第7トレンチ 完掘状況（北から）



かん山古墳 第8トレンチ 完掘状況（南東から）



かん山古墳 第1主体部(右)と第2主体部(左)検出状況(南西から)



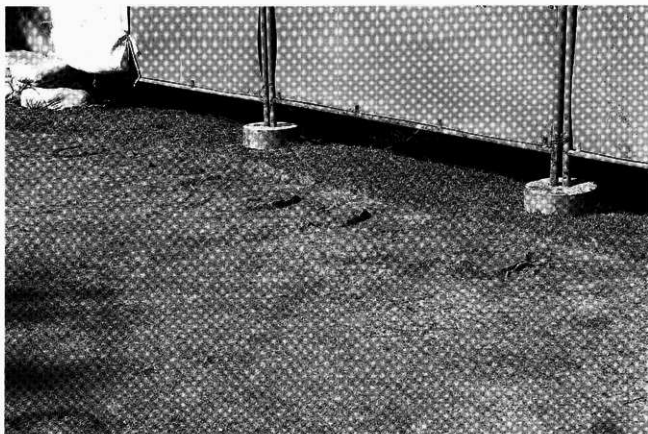
かん山古墳 第1主体部(左)と第2主体部(右)検出状況(北東から)



かん山古墳 第1主体部 盗掘壕トレンチ内 木棺、棺床検出状況 (上が北西)



かん山古墳 木棺



かん山古墳 墳頂 竈輪列検出状況



かん山古墳 墳頂 竈輪列半截状況

報告書抄録

書名 かん山古墳 第2,3次発掘調査概要報告

副書名

巻次

シリーズ名 大和高田市教育委員会 埋蔵文化財発掘調査概要報告

シリーズ番号

編著者名 前澤郁浩

編集機関 大和高田市教育委員会

所在地 奈良県大和高田市三和町2-19

発行年月日 2005年11月30日

所収遺跡名 かん山古墳

種別 古墳

主な遺構 墳丘、テラス、境界溝、墓塚、埴輪列

主な遺物 碧玉製管玉、大刀、鉄鏃、刀子、朱、円筒埴輪、家形埴輪

所在地 奈良県大和高田市築山487

特記事項

コード (市町村) 29202 (遺跡番号) 13-B-33

北緯 33 31 16.5682

東経 135 44 03.0402

調査期間 (2次) 2003年8月28日～2004年2月8日
(3次) 2004年10月7日～2005年3月31日

調査面積 (2次) 169㎡、(3次) 155㎡

調査原因 国庫、県費補助による範囲確認調査



かん山古墳 2 次、3 次調査

2005年11月30日 発行

発行 大和高田市教育委員会
奈良県大和高田市三和町 2 - 1 9

印刷 川村印刷所
奈良県大和高田市永和町 1 - 6

